

# 県一の水稲早期栽培

## 来年度は米の自給へ

「天草では毎年米が六万石不足しています。然し早期栽培の三十四年度目標四、〇〇〇町歩が達成できたら、郡内で自給できて、まだ余りますよ。」と県天草事務所松岡経済課長はズバリと云い切りました。又、若い技師はこう語っています。「天草では昔はカライモを常食としていたんですからね。先祖代々主食の増産には真剣です。土地は瘠せている為反収は四俵そこそこ。台風には毎年やられますし、早期栽培が他郡に先んじて普及しているのが当然でしょう。」

水稲早期栽培がとりあげられる以前の事ですが、昭和二十六年に県農業試験場の天草試験地が設けられて以来、その指導によつて二三年のうちに二条培土という栽培方式が全郡に普及して、反当約二斗の増収を挙げているのをみて、その事がうなづけます。毎年台風に打ちぬされ、用水不良田や湿田老朽田が多く、又、タバコや果樹、蔬菜等の作業が農繁期にカチ合うこの地域においては、早期栽培はもつてこの栽培方法でしょう。県下第一の普及率を示したのも無理もない事です。早期栽培は県農試と天草分場で昭和二十八年に試験栽培を行ったのが草わけて、その後天草では、二十九年三町歩、三十年三十町歩、三十一年三〇〇町歩とぐんぐん普及し、昨年は一、四一七町歩(郡内水田の二割二分)に拡がり県下の普及面積一、八二八・三町歩の約八割を天草で占めたわけです。而も収量は、これまでの普通作が郡内

で平均反収一石六斗八升だったものが、二石四斗と伸びているのですから、普及面積が四、〇〇〇町歩になれば、郡内で米の自給も楽にできるのです。これこそ天草郡にとつては一大飛躍でしょう。而も現在早期栽培を導入している田は主に湿田や瘠せた田が多いのですから、今後良い田へもどしどし導入するとすれば、その増収は著るしいものがありますよ。

### 後作には飼肥料作物を

処で、或る老人はこう話して呉れました。「早期栽培の後作に抑制カボチャをつつたが、これは輸送の面を考えたら採算がとれない。これを離れ島の悲しさだ。馬鈴薯や蔬菜などつくるよりも、天草ではやはり飼肥料作物をつつて家畜を養い、地力を養つた方が得だ。」と。県でも県事務所が先頭に立つて、早期栽培の後作の指導と地力の維持に重点を置いて、飼肥料作物や還元作物を奨励し併せて畜産の振興を狙っています。そして、栽培の集団化を重視し、部落町村の指導受入態勢を確立させ、又競作会では水稲の収穫ばかりでなく、「後作の成績」も織込むといった徹底ぶりです。今、天草郡内には農事研究グループが約九〇程ありますが、四十六名の県農業改良普及員の直接指導を受けながら、この水稲早期栽培やその後作について真剣に研究を続けているのです。県では今年の水稲早期栽培普及目

標を昨年の二倍強三、一〇六町歩(郡内水田の四割七分強)とし、更に来年度は前にも述べましたとおり四、〇〇〇町歩にまで伸ばそうと意気込んでいます。(これ以上はタバコ栽培の關係で拡げられません。)

こうして、「昔はカライモを主食としていた」天草も、順調にゆけば来年から一七五、〇〇〇石の米を生産し、自給一四〇、〇〇〇石を差引いた残りはず約

## ミカンの花咲く丘

### 高まる果樹栽培熱

今天草は水稲早期栽培とともに、果樹栽培熱が全島にみなぎっていると云つて

米として売渡すことができるというわけです。その前には、米の質の問題をはじめ、色々な隘路の打開などありましたが、ともかく、米の増収に加えて、後作による畜産の振興、地方の増大、或は労働ビークの排除により、今急激に増加しつつある果樹栽培へも進出が可能となりまさに早期栽培こそ、天草にとつては農業経営改革の突破口とも云えましょう。



(写真は蜜柑園の灌水)

みかんの植付が郡内各地に進んでいます。もともと、天草は、傾斜地が多く、年間平均気温は摂氏一六度冬でも霜がおりないという温かさで、みかん類の栽培には極めて適しています。そこで大正五年頃から栽培が始まったのですが、戦時中昭和二十三年には県の果樹試験場天草分場が設けられ、それとともに食糧難の緩和と労働の商業的方式化によつて、昭和二十九年頃から急速に増殖が進み、特に本渡市や五和町では技術、経営内容とも本県の主要生産地小田や河内に迫っている有様です。

### すゝむ蜜柑の新植

ここで、郡内で最も柑橋栽培の盛な五和町の或る果樹園を御紹介しましょう。五和町には栽培をしている農家が三五〇戸あり、そのうちでも、昨年十一月、県のモデル果樹園として十六カ所として指定を受けた坂本正満さんの果樹園は新しい技術を取り入れた模範的なものです。面積約二町歩で、ミカンとネーブル併せて二一五本の成木と、この二一三年間に新植した幼木とが、松山を伐り拓いた段々畑に整然と並んでいます。丘のふもとには約一反程の池がありこのほとりに動力小屋が建っています。動力は四馬力の発動機と薬剤散布用の高圧ポンプ機、灌漑用の四段タービンがあり、園内には、灌水用と薬剤散布用のビニールパイプが縦横に走つて、夫々四〇メートルパイプが二〇メートルのビニールホースと接続できます。又動力小屋の傍には薬剤調合槽もあり、これらの施設費として約三

十万円を要したそうですが、このほか、この町には「新農山漁村建設総合対策」の特別助成で造つた一〇〇石一八〇石入りの貯水槽が三〇数カ所あるほか、四人共同の一、五〇〇石入りという巨大な貯水槽もあるということです。又、運搬用ケールも六カ所あり、これは産品利用で一組につき約二万円しかかからなかつたそうです。

こうして、施設の充実とともに栽培面積も伸び、昨年は天草全島の栽培面積の二割を占める一〇二・五町歩のうち、収穫面積二〇町歩から約一〇万貫一、五〇〇万円を挙げています。又、間作には西瓜をつつて開墾費や苗木代を軽く産み出しています。

五和町では今年は一、二七・五町歩に増やし、四〇年度には二五二・五町歩にまで伸ばそうと計画を樹て、います。そして、果樹栽培の重要性から、この町には天草では本渡、牛深両市以外にはない「柑橋専門技術員」を配置しているのをみ

ても、その積極的な態度がうかがわれます。

この専門技術員の寺田さんや江上勸業主任、柑橋係の岩崎さん、柑橋組合の副組合長吉田さんなどはこもこも次の様に話して呉れました。

「たゞいま指導の重点を新植の奨励と幼木の育成、施設の完備、間作の上手なやり方においていますが、先進地に負けないようにと、皆熱心で落伍者が出る様な事は全くありません。」

「今後は、産地としての形をつくりあげる為、どうしても集団的栽培の方向に進まねばなりません。産地があらぬ山こちらの山に散らしては一大産地としては成り立ちませんからね。」

「風が強いので瘡痂病にかゝるおそれが多い。防風林対策も忘れてはならない。」等々。

又、五和町担当の県農業改良普及員川上さんは「今日の天草郡内の柑橋栽培は昔のように投機的経営から脱却して、農

業経営の一環としてうまくとり入れていきます。特に青年層の間では、柑橋を主体として農業経営が真剣に考えられています。これからもっと伸びますよ。」と話していました。

この五和町の場合は一例ですが、このように天草の柑橋栽培は今ぐんぐん伸びてゆく「少年期」と云うところでしょう。そこで、県でも、天草を柑橋の大きな産地として育成するため、「品種の統一」と「栽培の集団化」を基本方針として増殖に大いに力コプを入れています。特にこの地方は零細農家が多いため、「共同開園」の方法をすすめていのが注目されます。

こうして、かつては雑木林や松林であった生産性に乏しい傾斜地も、やがては天草の産業上重要なウエイトを占めるばかりでなく、文字どおり「みかんの花咲く丘」は「観光天草」にも大きないろどりを添えることでありましょう。

## 漁業は上げ潮

### 牛深の景気を見る

#### 急増したイワシ漁

二十四年の前半をビトロクに、それからおよそ六、七年にわたつて急激な下降線を辿つてきた牛深の漁業は、昨年の後半に入つてから、久しぶりで持ち直しの気配をみせてきました。

イワシが獲れる——不況の土壌場に追いこめられていた有業人口の約半分を占める漁民は、こゝで生氣と希望をとり戻し、牛深港には、久々に万越しの大漁旗を掲げた船団の帰る姿がみられるようになったのです。

こゝ牛深の、昨年四月から十一月にかけての総漁獲高は、二二五万六千貫で、とくに、九、十、十一月の好シーズンに

は、その約七〇パーセントに当る一五八万貫を水揚げしています。この漁獲の内容は、二十八年ごろから目立つて殖えてきた「あじ」が先づトップで一〇万三千貫、次いで「うるめいわし」の四二万三千貫、「まいわし」が四一萬八千貫とほぼ変わらず、「以下」さばが一十九万七千貫、「片口いわし」の六万貫となつています。「まいわし」「うるめいわし」の八四万二千貫のうち、十月に獲れたのが五九万七千貫で、この殆どが大羽(約四寸以上)ということです。

さて、水揚げされたこれら魚の行方は、鮮魚出荷に一一一萬八千貫、加工処理へ残りの一一三万貫が廻されている外、一七萬八千貫の煮干があつて、その大半が県外へ出されているそうです。